プロロ

登場人物：
ハンプティ
ダンプティ

詩の朗読。
双子　「「『Ｉｎ（イン） Ｍａｒｂｌｅ（マーブル） Ｗａｌｌｓ（ウォールス）』」」
タイトルコールはゆっくりと。
本文は言葉を投げ合って遊んでいるように、
テンポ良く抑揚を強めに。
二人はこの段階では互いに背中合わせで
井戸の縁に座っている。
井戸＝詩の中に出てくる泉のイメージ。
詩に表現された通りの場所＝大理石の壁の中にいるため、
全体に壁や水に反響するような澄んだエフェクト。
卵の内側を連想させる極々狭い空間。

ハンプティ　「♪お乳のように白い大理石の壁に、」
ダンプティ　「♪絹の柔軟（しな）した薄い膜（かわ）つけて、」
ハンプティ　「♪すいて凝（こご）った泉の中に」
ダンプティ　「♪金のリンゴがみえまする」
背中合わせから徐々に振り向いて、
アイコンタクトの一拍を挟み朗読の順番が入れ替わる。
ダンプティ　「♪そのお城に戸一つないので、」
ハンプティ　「♪泥棒共までわりこんで金のリンゴをぬすみだす」
ほど良く間を空けてから、
甘く妖しく子供が媚びるように。
双子　「「これ、なーぁに？」」
朗読終わり、ここから素の口調。
ダンプティ　「ねえ、何だろう。ハンプティ？」

ハンプティ　「さあ、何かしら。ダンプティ？」
ダンプティ　「それよりもさ、ハンプティ」
ハンプティ　「どうかしたの、ダンプティ」
ダンプティ　「ここは何だかとても寒いね。
　ほら、こんなに君の頬（ほ）っぺも冷たいよ」
ハンプティ　「貴方の手もすごく冷たいわ。
　まるで雪に埋もれた石ころみたい」
　息をひそめて間近の距離でくすくす話をするように。
　無邪気な会話に見えてほんのり儚さがちらつき始める。
　寒さを表現するように小さく溜息・吐息混じりに。
ダンプティ　「暖かいものが、欲しいね」
ハンプティ　「ええ、そうね。できたらふかふかの羽根布団」
ダンプティ　「母様みたいに柔（や）らかくて？」
ハンプティ　「母様みたいに優しく包んでくれるのよ」
ダンプティ　「僕らの母様は何処にいるのかな」
ハンプティ　「抱き締めて欲しいわ、眠りたい。
　眠くて眠くて仕方ないのに、」
ダンプティ　「寒くて寒くて眠れない。
　だって僕らは『たまご』なんだよ」
　だって僕らは×××なんだよ、と聞こえるように。
　『たまご』の部分は編集で伏せ処理。
ハンプティ　「母様がいなくちゃ何もできない、」
ダンプティ　「何処にも行けない。それなのに」
　慕情の裏に恨み辛みが湧き上がり二人の声音が翳る。
　恨み辛みに関しては二人は無自覚。
　次の台詞は特に情念を込めて。
ハンプティ　「ねえ、母様」
双子　「「貴女は何処に行ってしまったの？」」
　水面が微かにぴとんと波紋を立てる。
　そのまま卵の内側は静寂へ。

解説：

ハンプティ・ダンプティは卵の擬人化。
母鳥に置き去りにされ孵る事のできない卵。
すっかり冷たくなってもまだ二人は母鳥を求める。
母鳥を求める事を辞めてしまえば、
二度と生まれ得る可能性はないから。
もっとも、一度中身が冷たく凝固してしまった卵が
孵る事なんてないのだけれど。
二人はそれを認めない、認めたくない。
なお、舞台は二人の精神世界のようなもの。

演技上の注意：

この場にいない『母様』に語りかける部分では
リスナーに対して呼びかけるように。
他、対話相手が不在の朗読などについても
リスナーに語り聞かせているという事を念頭に置いて、
詩の内容が浮かぶような語りをお願いします。